

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26284089

研究課題名(和文) 軍事史的観点からみた18～19世紀における名誉・忠誠・愛国心の比較研究

研究課題名(英文) A Comparative Study of Honor, Loyalty and Patriotism in 18th and 19th Centuries from the Viewpoint of Military History

研究代表者

谷口 眞子 (TANIGUCHI, Shinko)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：70581833

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,700,000円

研究成果の概要(和文)：本科研では、18～19世紀のいわゆる「近代移行期」を対象とし、日本、中国、オスマン帝国、ドイツ、フランスにおいて、軍事の担い手が帯びていたエトスの特徴を、政治・経済・軍事・近代思想などさまざまな分野で、直接的・間接的に影響を及ぼし合っていた地域相互の連関性を考慮しつつ、軍事史的観点から比較史的に考察した。名誉・忠誠・愛国心のエトスは、社会における身分・階層・階級と伝統的思考方法を基礎とし、新たな軍事技術と軍事編制の導入、軍事思想の理念や軍事教育の方法、軍人の徴募方法、宗教・民族によるアイデンティティ、「国家」意識やナショナリズムなどと、複雑に絡み合いながら形成されたことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Using a comparative frame, our project team researched the characteristics of the military ethos of warriors from Japan, China, the Ottoman empire, Germany, and France in what is called the “modern transitional period” (18th and 19th centuries). We took into consideration various direct and indirect relations among these regions in the fields of politics, economy, military affairs, modern scientific thought, and so on. Our research showed that military values such as honor, loyalty, and patriotism were grounded in notions such as rank, status, and class in early modern society and traditional way of thinking, and resulted from of a complex combination of elements such as newly developed military technology, newly adopted military education, the military conscription system, ethnic and religious identity, and nationalism.

研究分野：人文学(日本近世史)

キーワード：軍隊 近代国家 名誉 忠誠 愛国心 ナショナリズム 軍事教育 軍事思想

## 1. 研究開始当初の背景

軍事史研究分野では、軍事と国家の関係について、軍事技術や戦術・戦法の変化と、絶対主義国家形成との因果関係を考察した軍事革命論、戦争遂行のための資金調達と、国家の金融・財政政策との関連から、近代国家の形成を論じた財政＝軍事国家論などが、提起されてきた。近年では「新しい軍事史」の研究潮流のもと、軍隊が特別な存在ではなく、日常的に社会と相互に影響を及ぼす関係にあったことが指摘されている。大規模軍隊による2度の世界大戦のイメージから、かつては「社会の軍事化」の視点が強かったが、最近ではジェンダーなども含め、軍隊を社会との関係性で幅広くとらえる、「軍隊の社会化」の視角が目目されている。

歴史学界においても、軍事史への関心はみられるが、多くが一国史の空間的枠組みで研究されていること、近世・近代の時代区分の時期が、各国で異なっていることなどから、軍事の取り上げ方は様ではない。近世ヨーロッパにおける軍隊は、一般に傭兵部隊に依存する割合が高かったため、兵士は雇主との双務契約的な関係のもとで軍事に従事する体制であった。また、行政職のみならず、軍隊の連隊長のような職も、売官制の対象であったことから、指揮命令系統が統一できず、上官への忠誠を求めることは、体制的に難しかった。しかし、近代的な一般兵役義務による徴兵制のもとでは、兵士の忠誠や愛国心のある程度確保できるため、逃亡を想定しない、新たな戦術や戦略も可能になった。フランス革命以降、愛国心が軍隊に持ち込まれた結果、軍隊は寄せ集めの集団ではなく、有機的な結合体へと変化していった。

このように、名誉・忠誠・愛国心を手掛かりにすると、いわゆる「近代移行期」における、国家や軍事力の新たな側面がみえてくる。たとえば、日本近世の武士は、軍人としての名誉ゆえに、他身分より厳格な規律化が求められ、江戸時代に形成された武士道の考え方は、武士の存在が否定された明治維新以降、国民道徳として新たな形で引き継がれていった。オスマン帝国では、専門技術を持つ非ムスリムのギリシア人が、帆船をしていたが、ギリシア独立による民族的アイデンティティの目覚めとともに、彼らの忠誠心に疑義が生じ、帝国艦隊の軍事力はそがれる一方、ムスリムであることを条件にした軍隊が作られていく。宗教や民族、軍事技術や徴募方法、社会的地位などの多様な要因と、その地域の近世的伝統が相まって、近代国家と近代軍隊が形成されていくのであり、軍人のエトスは、地域の多様性を解明するためのキーワードとなる。

## 2. 研究の目的

そこで本研究は、18～19世紀の東アジア、中東イスラーム地域、ヨーロッパにおいて、軍事の担い手が帯びていた名誉・忠誠・愛国

心を、比較史的に考察することを研究の目的にすえた。日本、中国、オスマン帝国、ドイツ、フランスを対象とし、軍事技術・軍事編制・徴募方法・軍事思想・軍事教育などの軍事史的観点から、民族的・宗教的アイデンティティ、ナショナリズムとの関係にも留意しつつ、軍事の担い手のエトスの構成とその変化を、比較史的に検討する。また、これらのエトスがどのように言説化され、後世に伝えられていったのかについても考える。それによって、各国史の空間的枠組みと、近世・近代という時代区分をこえ、「近代移行期」「近代国民国家形成期」と言われる時期の、新たな歴史像を提示したい。

研究代表者の専門は日本近世史であるが、自身の反省も含め、日本史は個別実証型の研究が圧倒的に多い。たとえば、『史学雑誌』の「回顧と展望」は、近世と近代の両方で幕末維新期の研究をとりあげるが、評価は異なっている。一国史の枠組みで、近世・近代の時代区分にもとづいてきた、これまでの研究方法から脱皮するために、本科研は2つの限定を付した上で研究を行う。

第一は、18～19世紀という時間軸を導入し、共時性の中で軍事を担う人々のエトスを比較すること、第二は、国家編成の変化をともしながら、政治・経済・軍事・思想などさまざまな分野で、直接的・間接的に影響を及ぼし合っていた地域相互の連関性を、射程に入れることである。その上で、社会における身分・階層・階級、新たな軍事技術の導入や軍事編制、軍事教育や軍事訓練の理念と方法、軍人の徴募方法、宗教・民族によるアイデンティティ、「国家」意識やナショナリズムといった視点を設定する。

名誉・忠誠・愛国心のあり方は、軍事の担い手が国制上でいかなる位置にあるかに影響される。身分制社会における軍人と、市民社会における国民兵では、軍事にたずさわることの意味や、それに付随する名誉のあり方に違いがある。徴募方法によっても、軍隊構成員であることの社会的ステータスは異なる。「国民国家」のもとで、徴兵制により創出された国民軍は、誰に対してどのような種類の忠誠を誓うのか、軍隊規律をどこまで適用されるのかなどの点で、世襲、志願、雇用により構成されていた、身分制社会の軍隊とは異なる。

何のために軍事力を行使するのか、軍隊で個人はいかに行動すべきかなど、軍事教育の理念や軍事訓練の方法も、使用される兵器の種類や戦術・戦略、国家に対する意識、宗教的・民族的アイデンティティと関係している。また軍事技術についても、新たな軍事技術の導入に対する抵抗は、「伝統的」なものへの愛着、「伝統的」でないものに対する忌避と簡単には片付けられない。従来の軍事技術を基礎にして軍隊が編成され、その地位に名誉が付随しているのであれば、新技術の導入は軍事的エトスと深く関わってくるからであ

る。そして、このような構造的変化の中で、軍事にたずさわる者がどのような回路で「国」を認識するのか、国民としてのアイデンティティや愛国心が、どのような過程で生成されていくのか、あるいは過去の軍人のエトスが、どのように読み替えられていくのかなどに、地域の特質が反映されることになる。歴史学、とくに西洋史学界においては、政治史・社会経済史から文化史へ、関心の変化がみられるが、軍事的エトスの比較研究は、心性や表象を、国家的装置との関連で考察する可能性を開くだろう。

歴史学においてはいまだに、「軍事史」という言葉が、ある種の抵抗感をともなって受け止められている。とりわけ日本史においては、太平洋戦争期における天皇制イデオロギーの源泉を、近代日本にさかのぼって求め、明治期の「軍人勅諭」「教育勅語」に天皇制軍隊の確立を見いだすなど、結果を説明するための原因を、時間的に遡及して探す傾向が強い。研究対象の時代に生きた人々が、当時の学知の状況や世界情勢の中で、ある事柄を選択したりしなかったりしたという、リアルタイム感覚やアクチュアリティの重要性は、十分に認識されているとは言い難い。

本研究は軍隊を、国家権力の暴力装置としてのみとらえるのではなく、軍隊が近代国家形成に不可欠であったことに注目し、18～19世紀の「近代移行期」における、軍事的エトスの変容を考察することによって、諸地域にみられたそれまでの多様な考え方・価値観が、それぞれの「近代」を形成していることを、軍事史的観点から明示するものである。

### 3. 研究の方法

研究チームは、ユーラシア大陸の東西を横断する、近世・近代のフランス・ドイツ・オスマン帝国・中国・朝鮮・日本を専門とする歴史研究者から構成した。日・東・西が集まって、自由に議論する場はほかにはなく、まずはメンバー各自が、自身の研究状況と研究課題・研究計画を発表するところからはじめ、相互理解を深めることに努めた。

地域としては3つに大別できるが、名誉・忠誠・愛国心というエトスは、身分制社会と市民社会、宗教、民族、軍隊編制と徴募方法、軍事技術の導入・開発、軍事教育・軍事訓練、軍事学・啓蒙思想など、多様な要素と関係をもちながら、相互に影響を及ぼし合っている。常に比較の観点を育てながら、メンバー間で発想や知識を共有できるよう、講演会やシンポジウムを設定した。2年目と3年目には、海外から研究者を招聘して、国際シンポジウムを開く企画もたてた。

なお、本科研の研究は、早稲田大学高等研究所のプロジェクト「新しい世界史像の可能性」とタイアップして行ったため、高等研究所のホームページを通じて、講演会やシンポジウムの開催を伝えることができた。

1年目と2年目は、若手セミナーを開き、

優秀な大学院生やPDに発表の場を提供した。普段接することの少ない、専門外の研究者に報告を聴いてもらうことは、研究の広がりにつながり、若手研究者育成の機会にもなると考えたからである。

### 4. 研究成果

#### (1) 史料調査・合宿

予算の関係から、海外の史料館での調査は、3年間の研究期間中、各自1～2回にとどまったが、国内の史料調査については、自由に行った。収集した史料をもとに論文を執筆し、研究会などで報告した。

合宿は4回実施した。軍人の名誉と忠誠がどのように顕彰されているのかを考察するために、戊辰戦争と西南戦争の関連史跡を踏査した。まず、戊辰戦争の戦場となった地域では、会津、箱館、北越で合宿を行った。会津では、戦死者慰霊の専門家から、戦場跡や白虎隊の墓、東軍・西軍の墓地などについて、解説を受けた。箱館では、津軽要塞跡や五稜郭などをまわり、箱館奉行所館長と箱館高専の専門家から、2日間にわたってレクチャーを受けた。北越(長岡と新潟)では、長岡周辺の北越戦争関連の記念館・博物館・史料館と、新潟の護国神社を回り、山本五十六記念館では、幕末の長岡藩とその後の歴史について、解説を受けた。

また、西南戦争最後の戦場となった鹿児島と、激戦地だった熊本も訪れた。鹿児島では、城山をはじめ鹿児島県歴史史料センター黎明館などを踏査し、田原坂西南戦争史料館では、学芸員から最新の発掘調査や博物館展示の方法も含めて、レクチャーを受けることができた。なお、太平洋戦争期に名誉・忠誠・愛国心がどのように喧伝され、あるいは戦士のエトスに影響を与えているのかを考えるために、万世特攻平和祈念館と知覧特攻平和会館の展示を比較した。

現地をまわり、展示の実物をみながら、フランスやドイツなどにおける戦争展示と比較し、議論ができたことは有意義であった。

なお、滋賀県長浜市の浅井歴史民俗資料館では、解説を受けながら「大郷村兵事文書」を見学し、日本史の生の史料に触れる機会も得た。

#### (2) 講演会・シンポジウム・若手セミナーの開催

講演会は、「反独=親仏、親独=反仏? ドイツ帝国のアルザス・ロレーヌと「愛国心」」、「戦争の社会学」の視角:社会学と歴史学の境界領域とその諸相」、「ドイツ近現代の「名誉・忠誠・愛国心」 ドイツ諸国の国歌を中心に」、「サムライ像の変遷 武将伝・武家説話の江戸と近代」、「幕末・維新の西洋兵学と近代軍制 大村益次郎とその継承者」の5回、開催した。

シンポジウムは、「18～19世紀の中央・東アジアにおける民族的アイデンティティ

と国家への忠誠」(報告は「帰属・国籍の変更に帝国への忠誠 カザフ遊牧民の民族的アイデンティティとの関連から」「八旗に編入された諸民族の自己認識と清朝への忠誠」の2本)、「18~19世紀における地理的認識とナショナリズム」(報告は「横井小楠・吉田松陰にみるナショナリズムの深淵」「近世日本における世界地理学と政治思想」の2本。なお後者の報告は、フランスのディドロ大学教授による)、「軍事技術・軍事訓練と名誉・忠誠」(報告は「幕末日本の洋式海軍創設と浦賀奉行所」「19世紀“洋式軍隊”考 非ヨーロッパ世界はいかなる軍隊をモデルにしたか」の2本)の3回、実施した。

若手セミナーは、「日本における戦争報道 西南戦争における情報統制と記者派遣」「エゴドキュメントから読み解く忠誠のヨーロッパ史」(報告は「ヴァイマル期ドイツ義勇軍戦士における忠誠と叛逆」「メモワールから読み解く近世フランス貴族の忠誠」の2本)、「近世バイエルンにおける軍務官の名誉と忠誠 役人と軍人、領邦君主と皇帝のはざま」の3回、開催した。

そのほか浅井歴史民俗資料館見学時に、「19世紀のアメリカ海軍兵学校における規律維持問題 体罰や決闘に注目して」と「戦後日本における傷痍軍人会の結成とその変遷にみる自己認識」の報告も聞いた。

講演会、シンポジウム、若手セミナーではいずれも、さまざまな観点から討論が行われ、通常は夜の10:30頃まで議論が続いた。当初は、多方面からの意見にとまどうこともあったが、広いエリアと長い時間軸で、自由に意見交換をすることに慣れ、各自が自身の研究を相対化することに役立った。

### (3)国際シンポジウムの開催

2年目には、フランスのパリ第1パンテオン=ソルボンヌ大学教授で、フランス革命史研究所所長でもあるピエール・セルナ氏を招聘し、講演会「現代社会とフランス革命」(コメントは「共和主義 総力戦 消費社会」)と、国際シンポジウム「革命と軍隊 明治維新・辛亥革命・フランス革命の比較からみえてくるもの」(報告は「農兵」と明治維新 鳥取藩領の事例を素材に)、「軍隊の動向からみた辛亥革命」「革命、独立戦争、共和国の戦争」の3本)を開催した。また、埼玉大学で開かれた、セルナ氏の講演会「フランス革命の前と後 植民地・奴隷・黒人」にも共催した。

3年目には、トルコのイスタンブール大学歴史学部准教授のギェルテキン・ユルドゥズ氏を招聘し、講演会「無名の兵士 近代トルコ(1792~1918)における軍事的エトスと市民権の形成」(コメントは「オスマン帝国の軍制改革と近代化への問い ドイツ史の視点から」)、国際シンポジウム「軍事的エトスの近代史」(報告は「武士道」はなぜ生き残ったのか)、「ロシア革命は兵士を市民にした

のか)」「ラスト・イエニチェリ 近代戦争期におけるオスマン/トルコの軍事的エトスの転換(1826~1927)」)を企画した。ところが、国際シンポジウム開催予定の一週間前に、イスタンブールで軍事クーデター未遂事件が勃発し、ユルドゥズ氏は来日不可能となった。しかし、事前に講演会の原稿と国際シンポジウムの原稿を受け取り、トルコ語から日本語に翻訳する作業も終了していたため、招聘者不在で、講演会とシンポジウムを予定通り実施した。

世界情勢をかながみれば、テロなどにより、今後も招聘者が来日できないことがある。今回は、インターネットでの連絡もできなかったことから、スカイプによる参加も不可能だったが、急遽、オスマン帝国やトルコに関する基礎的な歴史のレクチャーをもうけ、一対一の質疑応答形式を、パネルディスカッション形式に変更するなどの措置を講じた。通訳の時間がなくなった分だけ、むしろ活発に議論を行うことができ、招聘者不在にもかかわらず、密度の濃いシンポジウムとなった。メンバーの一致団結した協力体制の重みを、改めて感じた次第である。

国際シンポジウムの開催には、煩雑な書類手続きのほか、他の報告者との論点のすりあわせなど、多大な労力がともなう。報告依頼者の選定からはじまり、異なる国の歴史研究者をそろえるために、事前の勉強や準備報告会も開催しなければならず、他の講演会やシンポジウムと併行して準備するのは、正直なところ負担でもあった。しかし、準備段階で勉強して議論することにより、軍隊をはじめとする軍事的世界を、これまでとは異なった視点から見るようになってきた。

### (4)得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

軍事史的観点の重要性の認知  
各自が著書や論文を執筆・刊行することにより、軍事史的観点からの研究に、関心が高まってきたと考えられる。その一例として、この科研で研究分担者や連携研究者をつとめるメンバーが、新たな科研に採用されていることがあげられる。また、科研メンバーが他の科研から研究発表を依頼されたり、他の科研と合同で、西南戦争関連の合宿を行ったりするなど、研究者間のつながりも広がりつつある。なお、本科研の3年間の研究活動が認められ、早稲田大学高等研究所のプロジェクト「新しい世界史像の可能性」が、あと3年間継続されることになった。

近世から近代を考える視点の共有  
2017年5月21日(日)に一橋大学で開催された、第67回日本西洋史学会大会において、本科研の代表者、研究分担者、連携研究者、研究協力者で、シンポジウム「忠誠のゆくえ 近代移行期における軍事的エトスの比較史」を企画した。

代表者は、「西周の軍事思想 服従と忠誠をめぐって」と題する報告を行ったが、西周の故郷である島根県からの来聴者もあり、研究協力を依頼されるなど、手応えはあったと言える。また、近世の人々の目で近世からまだ見ぬ未来を考える、すなわち、結果を知っている近現代の目で、過去を見るのではなく、アクチュアリティをもって、歴史を下っていくという視点が、共感を持って迎えられ、研究成果発表としての責務は果たせたようである。出版社から論文集刊行の話があり、現在企画を構想中である。

#### 国民への発信

研究活動を国民と共有するために、講演会やシンポジウムを、すべて事前予約不要・入場無料とし、高等研究所のホームページを通じて開催予告した。また web ジャーナルや、CiNii に論文情報が載るような雑誌に、論文を掲載することによって、多くの人の目にふれやすい環境での成果発信を目ざした。

2回の国際シンポジウムについては、谷口眞子・笹部昌利・吉澤誠一郎・ピエール・セルナ・鈴木直志「国際シンポジウム『革命と軍隊 - 明治維新、辛亥革命、フランス革命の比較からみえてくるもの』」『早稲田大学高等研究所紀要』第8号(2016年)と、谷口眞子・小松香織・小原淳・原田敬一・池田嘉郎・竹村厚士「ギュルテキン・ユルドゥズ講演会と国際シンポジウム『軍事のエトスの近代史』の報告要旨」『早稲田大学高等研究所紀要』第9号(2017年)に記録を残した。

そのほか、公開講演会などで研究成果の一部も発表した。代表者は、佐賀城歴史博物館で葉隠成立300年記念講演を行い、研究分担者の鈴木直志と丸島宏太は、ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会(東北学院大学)で講演を行うなどしている。

国民に向けた発信は、歴史学の重要性を認識してもらうためにも、貴重な機会であると考ええる。

#### 国際的発信

代表者は本科研の研究成果を、ポルトガルのリスボンで開催される EAJJS(European Association for Japanese Studies) (2017年8月30日~9月2日)のパネル「The Samurai and Realms of Memory」で、The Historical Reception of Hagakure—Honor, Loyalty and Patriotism というタイトルにて発表することになった。

#### (5)今後の課題

今回は歴史研究者だけで、研究チームを構成した。まずは日・東・西で、共通に議論ができるプラットフォームが必要であると考えたからである。その目的は、一応達成されたと考える。

本科研を通じて、軍事という世界が、社会学や文学、教育史や政治思想史など、人文学

の枠を超え、幅広い研究分野と関連していることを、改めて認識した。すでに本科研の講演会では、戦争社会学や日本文学の研究者に講演を依頼し、学際交流も試みている。

代表者は、日本文学については、編者の一人として『日本「文」学史 第二冊』(勉誠出版、2017年)を出版しており、また2017年度中に、分担執筆者として、日本法制史のテキストを刊行する予定である。文学と法制史の論考を準備しながら学んだ研究を、本科研の成果発表にも取り入れており、学際研究の必要性を痛感している。

本科研は終了したが、2017年度に、医学史や政治思想史の研究者などを招聘して、講演会を企画している。今後は、歴史学をベースにしながら、隣接諸分野の研究者とも共同しつつ、この研究テーマをさらにふくらませ、豊かな軍事の世界を描く挑戦を続けていければと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計14件)

谷口眞子「読み替えられた「葉隠」 その刊行と受容の歴史」『早稲田大学高等研究所紀要』第9号、2017年、pp.71-83、査読有

谷口眞子「近世中期の日本における忠義の観念について 山崎闇齋学派を中心に」『WASEDA RILAS JOURNAL』(早稲田大学総合人文科学研究センター) NO.4、2016年、pp.394-406、査読有

小松香織「近代トルコにおける軍人のエトス」『教育学研究科紀要』第27号、2017年、pp.17-31

鈴木直志「連隊簿からみた近世プロイセン軍隊社会(上) - 1792年の歩兵第三連隊の事例」『中央大学文学部紀要』(史学)第62号、2016年、pp.135-162

丸島宏太「国民国家黎明期(一九世紀前半)の兵営生活の一断面 プロイセン軍志願兵 F.W.ハックレンダーの回想記から」『ゲンヒテ』第9号、2016年、pp.19-33

西願広望「功利主義の戦争文化とバレールの革命戦争論 世界史再考のために」査読有、『日仏歴史学会会報』(日仏歴史学会)31号2016年、pp.3-18、査読有

谷口眞子「佐賀藩の殉死にみる「御側仕え」の心性」『早稲田大学高等研究所紀要』第7号、2015年、pp.78-96、査読有

谷口眞子「殉死の記憶と顕彰 佐賀藩鍋島家を事例に」『書物・出版と社会変容』第18号、2015年、pp.27-47

佐々木真・古谷大輔「フォーラム 近世史研究の現在と「礪岩のような国家」への眼差し」『西洋史学』257号、2015年、pp.58-68、査読有

杉山清彦「二つの新興軍事政権 大清帝国と徳川幕府」清水光明編『「近世化」論の日本 「東アジア」の捉え方をめぐって』(勉誠出版、2015年)、pp.41-55

谷口眞子「近世前期の兵学とは 文武・治

乱をめぐる認識』『書物・出版と社会変容』  
第 17 号、2014 年、pp.1-26

鈴木直志「若きクネーゼベックと啓蒙 - プロイセン開明将校点描」『軍事史学』第 50 巻  
第 2 号、2014 年、PP.23-39

丸島宏太「一九世紀ドイツの兵士」『軍事史学』第 50 巻第 2 号、2014 年、PP.4-22

佐々木真「「ラインの渡河」の表象」『軍事史学』第 50 巻第 2 号、2014 年、PP.40-57

〔学会発表〕(計 12 件)

谷口眞子「西周の軍事思想 服従と忠誠をめくって」

吉澤誠一郎「辛亥革命にみる軍人の忠誠と反逆」

鈴木直志「ドイツにおける軍旗宣誓」  
( ) は、第 67 回日本西洋史学会大会小シンポジウム 5「忠誠のゆくえ 近代移行期における軍事的エトスの比較史」での口頭発表)、2017 年 5 月 21 日、於一橋大学

鈴木直志「プロイセン旧歩兵第三連隊とその兵士たち」ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会、2016 年 12 月 3 日、於東北学院大学

丸島宏太「兵士の日常生活から見る 19 世紀プロイセン軍 兵士 F.W.ハックレンダーの回想記を中心に」ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会、2016 年 12 月 3 日、於東北学院大学

吉澤誠一郎「民国初年の対日ボイコットにおける東南アジア華僑と孫文」孫文生誕 150 周年記念国際学術シンポジウム、2016 年 11 月 27 日、神戸大学統合研究拠点、於兵庫県神戸市、招待講演

吉澤誠一郎「武士道の近代命運：晚清中國的尚武理念與性別重構」第 5 届「漢化・胡化・洋化」：傳統社會的挑戰與回應國際學術研討會、2016 年 11 月 5 日、國立中正大學、於台灣嘉義縣民雄鄉、招待講演

西願広望「世界革命としてのフランス革命 - 暴力の比較文化史」、クラウゼヴィッツ研究会 2016 年 9 月、於学士会館(東京)

松本彰「国家に謳われたドイツ プロイセン、オーストリア、ドイツの国歌とナショナリズム」九州歴史科学研究会戦後 70 周年記念シンポジウム、2015 年 11 月 7 日、於福岡大学、招待講演

鈴木直志「「歴史の場」としての『戦争論』 - クラウゼヴィッツと近世の戦争」2015 年度日本クラウゼヴィッツ学会シンポジウム、2015 年 10 月 24 日、於文京シビックセンター

柳澤明「「八旗」と「民族」の交差 清代旗人のアイデンティティ複合」東北大学東北アジア研究センターシンポジウム「越境の東北アジア：統治の動揺と地域流動化」、2015 年 3 月 8 日、於東北大学東京分室

西願広望「戦争の文化とバレールの夢(日本語訳タイトル)」(ソルボンヌ・フランス革命史研究所・ヴィジールフランス革命博物館共催日仏シンポジウム、2014 年 9 月 3 日、フラ

ンス(ヴィジール)、招待講演

〔図書〕(計 4 件)

佐々木真『増補新装版 図説 フランスの歴史』河出書房新社、183 頁、2016 年

佐々木真『ルイ 14 世紀の戦争と芸術 生み出される王権のイメージ』作品者、516 頁、2016 年

杉山清彦『大清帝国の形成と八旗制』、名古屋大学出版会、574 頁、2015 年

鈴木直志『広義の軍事史と近世ドイツ - 集権的アリストクラシー・近代転換期』、彩流社、364 頁、2014 年

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

谷口 眞子 (TANIGUCHI, Shinko)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：70581833

### (2) 研究分担者

柳澤 明 (YANAGISAWA, Akira)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：50220182

小松 香織 (KOMATSU, Kaori)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：10272121

丸島 宏太 (MARUHATA, Hiroto)

敬和学園大学・人文学部・教授

研究者番号：20202335

鈴木 直志 (SUZUKI, Tadashi)

中央大学・文学部・教授

研究者番号：90301613

### (3) 連携研究者

吉澤 誠一郎 (YOSHIZAWA, Seiichiro)

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授

研究者番号：80272615

佐々木 真 (SASAKI, Makoto)

駒澤大学・文学部・教授

研究者番号：70265966

原田 敬一 (HARADA, Keiichi)

佛教大学・文学部・教授

研究者番号：70238179

杉山 清彦 (SUGIYAMA, Kiyohiko)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：80379213

須田 努 (SUDA, Tsutomu)

明治大学・情報コミュニケーション学部・教授

研究者番号：70468841

趙景 達 (CHO, Kyondaru)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：70188499

### (4) 研究協力者

西願 広望 (SEIGAN, Kobo)

松本 彰 (MATSUMOTO, Akira)